
氷室 真由子の悲劇 改

のるん りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷室 真由子の悲劇 改

【Zコード】

N5197Z

【作者名】

のるん りな

【あらすじ】

特別矯正教師にしてL1格闘家の氷室真由子

いま真由子に人生始まって以来最大のピンチが訪れる

本作品は“梨奈の世界”に掲載中の「氷室真由子の悲劇」の大改訂版となります

もしどうしても先が読みたい場合は、[梨奈の世界](#)をぐぐつみてください

未改訂版がかなり先まで掲載済みです

第1話 使命（前書き）

はじめまして 梨奈 です
本作品は 非常にせまい趣向の作品です
ある女子格闘家を中心とした 戦いと 愛と 笑い に満ちた物語
です
楽しで頂けたら幸いです

題名に改とあるように 本作品は改訂版です
未改訂の原版は H.P 梨奈の世界 で掲載中です
もしよければ そちらも覗いてね

できるだけ 早いスピードで投稿していくつもりです 応援よろしくね

第1話 使命

第1話 使命

文部科学省 高等教育局 局長室

「・・・という内容なんですが お願いできますか?」大きな机に座った初老の男が白いハンカチで汗を拭きながら、かなり心配なだろう机の前に立っている者へ阿おもねるよう尋ねる。

「はい、いいですよ だいたい3ヶ月もあれば、なんとか成ると思います ああでもL1の大会には出場させてくださいね」一方机を挟んでその質問に答える声は明るく明瞭で質問者の声とはかなり対照的だ。

「ええ それはもちろん L1は国民的な行事ですからね 我が文科省代表としては是非是非頑張って頂きたいのです」その答えに大きく安心したのか、机の前に立つ回答者にちらりと眼を向ける余裕が出来た初老の男。

禿の初老の男の前で、右手を腰にあてながら話を聞いているは女性。それも意志の強そうな顔立ちのすつきりした感じのかなりの美人。体格にも恵まれて一見モデルに見える様な女性だった。

そう彼女こそが氷室真由子、今年で33歳、身長168 体重55スリーサイズは上から84、58、85のDカップという誰もが羨やむプロポーションを誇る女性だ。

そしてその真由子の容貌は印象的な意志の強さを伝えるぱっちりとした二重瞼の目、頬がちょっと高く、形よくすっと通った高い鼻、整った紅い唇、尖った顎。ちょっと日本人離れしたきりりとした顔つきだ。

黒のタンクトップの短めのカットソーを着ているので、がつしと張

り出した肩と、綺麗な鎖骨が浮き出ているのがはっきりと見える。肩まで伸びる黒髪、透き通るような白い肌の肩口に対照的な黒髪が映える。ぐつと張り切った乳房と、カットソーの裾からちらちらと覗く腹筋、引き締まつたウエストと縦長の綺麗な臍^{へそ}が印象的だ。そして張りきつた形のいい臀部が、白のタイトスカートをグンと盛り上げる。膝上15センチのタイトミニからすらっと伸びる生足が眩しい。ちょっと米倉涼子に似たスーパー美人だ。ただし本人曰く「米倉涼子が氷室真由子に少し似ている」のだそうだ。たいした自信だな真由子。

こんな容姿を誇る真由子だが生業は高校の教師だ、ただし一般の教師ではなく特別矯正教師（通称“特矯教師”）だ。特矯教師とは文部科学省高等教育部局長直轄の教育環境矯正特別査問委員会に所属する国家公務員だ。教育環境矯正特別査問委員会は、正常とは言えない状態の教育環境の正常化を目的に設立された、検査・調査・監視権限に基づく公権力を持つ実力組織だ。端的に云うと強制的に不良学生を矯正することを専門とする特別矯正教師を管理・派遣する組織だ。

特別矯正教師は、特別公務員職で検事と同様に職務遂行上における、独任制と逮捕・検査権を有している。

本職に任用されるためには、教員免許及びなんらかの精神医療科系の資格と、優良な格闘技術を有することが条件とされる。特別矯正教師とはいわゆる教師とカウンセラーと警察官の融合を目指とした縦割り行政的手法とはまたつく真逆な存在と言える。一種の教育現場におけるワンマンアニー的存在といえるだろう。

真由子は、体育保健の教員免許と精神療養士の資格を持ち、JLK（日本女子キックボクシング）の現日本バンタム級チャンピオンで、昨年のL1（Ladies of No.1）World Max

大会、バンタム級世界チャンピオンもある。特別矯正教師としても一握りのSGランクに位置付けられている。なお特別矯正教師のランク付けはSG（Super Greatness）、G（Greatness）、N（Normal）、B（Beginner）となっている。

【聖光女子学園かあ聞いたことあるな】禿親父の云つた赴任先の学校名を思い出す真由子。

聖光女子学園は、歴史ある有名な私立女子学校、幼稚部から大学院までの超一貫教育を誇る総合教育学園だ。しかしここ数年に渡り極悪な不良グループが高等部を裏から牛耳り、過去に誇つた超優良高校の面影を失いつつあった。

その状況に憂慮した卒業生の父兄関係者のとある大物政治家から文科省に対し極秘裏に環境矯正の依頼があり、事務次官の目の前でこの禿親父が簡単に安請け負いをしたらしい。まずは有名な教師やら専門家が学園に派遣され、その悉くが失敗におわった。そして満を持して派遣された特矯教師もまた不良グループの前に敗北を喫している。

これは極めて異例の事態だった。

政治家と事務次官からの圧力が相当厳しいのだろう。2度の失敗に禿親父はかなり厳しい立場に立たされていた。もう3度目の失敗は許されない、次の失敗は禿親父の進退問題へと発展するだろう。それが禿親父にSGランクの特矯教師の中でも掌中の玉とも云える真由子を選任させた所以だ。

「いや よかつた 引き受けて貰えますか いやほんとに助かりました」

今真由子の前でしきりに汗を拭きながら、そんな独り言を呟いてる禿親父こそ、文科省次期事務次官候補のレースで先頭に立っている文科省高等教育局局長だ。まあ完全な自業自得ではあるが、禿親父

の未来は今や真由子の矯正の成否にかかっていた。

真由子にして見るとそんな事情は全く関係ないが、矯正現場が有名な私立名門女子高校であることが興味を引いており、この要請ははなつから引き受けるつもりだった。なおGランク以上の特矯教師は任務への拒否権を有しており、それは局長命令いや事務次官、大臣からの命令であっても拒否可能であり、過去に何ども拒否権を発動した実績のある真由子に、今回も命令拒否されることこそが禿親父が最も恐れていた事態だったのだ。

禿親父と話しながらも真由子は事前に渡されていた調査報告の内容を思い出していた。

聖光女子学園高等部 内部調査報告 H112A0004・2

現時点で存在が確認された学園内の有力不良グループは3チーム。構成員数は約30名。

なお構成員の大半は、体育系のクラブを隠れ蓑にして活動中。またこの3チームの上位組織の存在を確認。

上位組織名は、”鬼狂姫”構成員は2名。

佐伯沙羅	16歳	2年	生徒会会長	身長155	体重75
流山柚月	16歳	2年	生徒会副会長	身長162	体重47

上記2名以外にも”鬼狂姫”直属のメンバが存在する模様。詳細は調査中。

【生徒会の会長と副会長が 裏のボスねえ 相当しつかり組織化されてるんだろうなあ

”鬼狂姫”ねえ ちょっと矯正しがいがありそうね】

「現場への赴任はいつになりますか？」

そう云いながら二口づと笑う真由子、口許がほころびそこから綺麗な白い歯が覗く

第1話 使命（後書き）

いかがでした 第1話 使命
基本 状況説明でしたね

2話以降 やつと物語は進んでいきます
お楽しみね

第2話 赴任（前書き）

連続 投稿で～す

やつと 真由子らしさが すこしづつ現れてきました
みなさん が 真由子を好きになつてくれると嬉しいですね

第2話 赴任

第2話 赴任

聖光女子学園高等部 大講堂

ステージ上の演壇に立つ銀髪の親父が口を開いた。

「本日から我が聖光女子学園高等部に赴任された氷室真由子先生です。氷室先生は皆さんもご存知の通りレーベルの世界チャンピオンです。本校においても幾つかのクラブの顧問を担当して頂きます。皆さん、こんな貴重なチャンスは滅多にありません。氷室先生の世界レベルの指導を有意義に活用してください。」この説明に講堂内がざわつき始める。

紹介が終わると同時に真由子が講堂の緞帳の陰からステージの中央に颯爽と歩みでる。

ステージ中央で立ち止まると左右に視線を走らせる、両手を身体の前に揃えてゆっくりと深々とお辞儀をする。

肩まである黒髪がサラサラと流れ落ちる。

【やっぱ女子高だ ぴちぴちの女子高生ばっかしね それにさすが聖光女子よね結構可愛い娘が多いじゃないの これはちょっと楽しみかもしないな】その深々と頭を下げた姿勢のままとんでもない感想を思い浮かべる真由子。

「みなさん おはようございます。今紹介された氷室です。皆さんと共に楽しい学園生活を過ごしたいと思っています。よろしくお願ひしますね」

今日の真由子の格好は、肩が大きく露出された白いブラウスと膝上

25センチの黒のタイ

トスカート、真っ赤な12センチのピンヒールのパンプスだ。

短い挨拶を終えるとすっとお辞儀をする。頭を上げると正面を見ながら右手の中指ですーっと垂れた髪をかきあげながら一ひとと笑顔を浮かべる、これは真由子の有名なお決まりのポーズ。

そのポーズと笑顔に思わず講堂中がどつと沸き上がる。少女特有の黄色い歓声が幾つか聞こえる。

「すつごーい 本物の氷室真由子よ わたしファンなおお

「あの脚ちょっとおお綺麗」

「テレビで見るよりずっと素敵だねえ」

「背が高いいい それにすつごくスタイルいいよねえ」

「あんな綺麗なのに L1の世界チャンプなのよ あとでサイン貰おうっと」

「無敵無敗のスーパー・チャンプだっけ?」

「そりそりそれに 絶対女王 美貌の狂戦士でっしょ~」

「闘う公務員 氷室真由子つよね かつこいいいい」

そんな講堂内の大部分を占める歓声やじよめきとは別に、幾つかの敵意剥き出しの視線がじつと真由子を睨む。

「ちつ あれが次の特矯センコーか、いけすかないね」

「けつ L1チャンプが なんぼのもんかい 前回同様に捻つてやるさ」

「香奈枝すぐに雨灘さまに連絡をとりなさい 今回赴任してきた特矯教師は氷室真由子 ランクはSランク ビリやう一筋縄では行きそうもないとね」

まさにその言葉はこれからの中未来を適確に暗示した言葉だった。

「わかりましたか？ 性病の感染経路のほとんどは男性との性交渉に原因があります したがって不特定多数との性交渉や無防備な性交渉は絶対に避けるようにしてください」 テキストを左手に持ちながら生徒達の間を、カツカツとヒールの音を響かせながら歩いていた真由子がふっと立ち止まり、テキストから目をあげる。

「性病や望まない妊娠など あなたがたのような若い女性にとって男性とのSEXは危険性があまりに高いわね 私的意見としては、男性とのSEXそのものを避けることをお勧めしたいわね」 さらりと言いつける真由子。おい真由子文科省監修のテキストにもそこまで書いてないぞ。

クラスの中の幾つかの視線が真由子に向けられる。

「いいですか その点から考察するなら 女性間でのSEXは非常に危険性が低いです 男性同士でのSEXで危険性の高いエイズ感染の危険性も女性間でのSEXでは非常に低い訳です」 完全に脱線する真由子。ざわざわとし始める教室。

「これも私的な意見ですが まあ男性っていう生き物はわたしに云わせるならあまり優等性も感じないし、必要性も感じないですね」 ますます脱線が激しくなる真由子。

「先生、男性の優等性つてのは肉体的・体力的には認めない訳にはいけないんじゃないですか？」 一人の生徒が思わず立ち上がり反論する。まあ妥当な反論だな。

「そりかな？ そんなことわたしは認めないわよ わたしは一度も誰にも負けたことはないし これからも誰にも負けるつもりはないわ それは相手が男性だとしてもね」 その反論した生徒に向かって二口づと笑いながらウインクする真由子。真っ赤になつて椅子に座つてうつむく反論した生徒。

黒板の前に戻るとさつと生徒側に振り返れる真由子。

「さてみんなさんは知っていますか？ 性の原型はメスであることを性の原型から進化した存在がメスで、性の原型から特殊化したのがオスなのです、最近の群体性ボルボックス目での研究結果による遺伝子が10個発見されており、細胞分裂して小さな精子を形成するというオスらしさを特殊化させた原因の遺伝子群のひとつであると推測されます。まあいかえればオスは精子を作る為だけに特殊化した存在ではないかと・・・・・」保健体育の授業が特殊な生物の授業に変化しだしている。しかもちよつと捻じ曲がつてないか真由子。

【へんな女ね あれが氷室真由子か・・・】持ち前の持論をどうとうと語る真由子を教室の後方からじっと伺う視線。

聖光女子学園高等部 体育教官室

誰もいない静かな教官室の椅子に一人座る真由子。黒のタイトスカートからすらっと伸びる脚を斜めに組み、デスクの上でほおづえを突きながら何枚かの写真と報告書をじっくりと眺める真由子。なかなか絵になる格好、だが問題はその報告書の内容だった。

“佐伯沙羅 16歳 2年 生徒会会長 身長155 体重75”
写真の白枠に印刷された文字。

A4版の大きな全身写真には、まるでピア樽のような縦よりも横が大きいようなチビテブの姿が写っている。顔が身体に比べるとかなり大きく下顎が発達して四角い。そしていかにもといった顔の表情、その顔の中心に寄った吊り気味の目がなんとも小さくて印象的だ。その小さな目にはかなりの凶暴さを感じる。頬骨が大きく高い。鼻はなにかの事故で潰れたのか、ちょっと左に曲がって低い。かなり

口がでかい。さぞ大きな声が出るのだろう。薄い唇。ごつい顎。短く刈り上げた深い茶の短髪、一言で云つなら、凶暴な野生の豚だ。

【さぞかし子供の頃から固い物を食べていたのね 顎がほんとに立派に成長してるわあ うーん 公式には格闘技の経験なしか・・・でも中学から喧嘩では全戦全勝という伝説があるのよねえ・・・んっ！ 兄貴が駒風部屋の十両なのねふうん これね 相撲ってのはちょっと厄介ねえ で こつちはどうなの・・・】じつと見ていた写真をぽいと無造作に投げる真由子。

“流山柚月 16歳 2年 生徒会副会長 身長162 体重47”もう一枚のA4版の全身写真をデスク上から2本指で摘み上げる真由子。体格的にはいたつて普通な感じ、顔全体は沙羅とは反対に細長い瓜顔だ。髪は胸元までの黒の長髪、前髪は切り揃えられており、その前髪の下に見える額がやけに広いのが特徴的。眉が薄く細長い眼、鼻筋は長くその下には薄い唇が続く、そして尖った顎。沙羅が野生の豚なら間違いない性悪な狐を連想させる。

薄い眉の下の一重瞼の奥の瞳に何かを感じる真由子。

【ふうん こちらも格闘技の経歴はなし 喧嘩の記録もなしかあん？ へえーっ IQ127！ こりや凄い つまり沙羅が武闘派で 柚月が知能派つてわけね でも こんな普通そうな子が 工 Q127かあ】

写真を再びぽいとデスクに投げ捨てるが、今度は字がびしつりと詰まつた報告書を手に取る真由子。

聖光女子学園高等部 内部調査報告 H112A0008・1
暴力的不正支配組織：“鬼狂姫”^{きくひ}、

調査の結果鬼狂姫は12年前から存在している事が確認される。当初は組織名ではなく、特定の個人を指す名称だったと思われ

る。

その後小数人の指導者グループを現す組織名称に変異していったものと思われる。

数年置きにメンバ交代が行われており、現組織は、5代鬼狂姫と呼称されている。現組織から過去2世代の4代鬼狂姫と3代鬼狂姫の構成メンバは確認済みである。

しかしながら初代鬼狂姫および2代鬼狂姫の正体は未確認である。なお初代及び2代は個人としての活動であった可能性が高い。各世代間における連絡・連携の具体的痕跡は確認できていないが、当然ながら連絡・連携が存在するであろうことは十分に推察される。したがつて単なる不良少女の暴力組織と認識せずに成人による非合法組織暴力集団レベルと認識する必要があると結論づける。

10枚以上ある報告書を斜め読みしながら、次々に1枚1枚ぽいぽいとデスクに投げ捨てる真由子。

更に数枚の写真に目を通しながら、写真の名前を頭の中で読みあげる。

葉山早苗、七瀬千夏、加賀美月。みつき最後の名前にひつかる真由子【美

月 ん？ この娘わたしの受け持ちのクラスの娘かな】

ちらつとさきほどの授業の記憶を呼び起こす真由子。

報告書を全てデスクの上に投げ捨てる、両手を組んで人より少し長くてかなり太い両腕をぐうっと頭の上で伸ばす。

【ふ～ん 伝統ある不良組織ってことお でも現段階において外部勢力の介入の痕跡なし

かあ まあどちらにせよ 沙羅と柚月をなんとかすれば 大概のことは方が付くわね】腕を戻すと今まで目を通してデスクの上に散乱した報告書やら写真やらを、適当にばさばさとまとめると大きな茶封筒にばさっと入れる。その茶封筒をデスクの一番下の大きな引き出しにぽいと投げ入れると鍵を懸ける。どうもその様子から性格的

にはあまり几帳面な様ではなくかなり大雑把な感じな真由子。

組んでいた脚を崩し椅子からすっと立ち上ると、つかつかとハイヒールを鳴らしながら教官室の右手奥に向う真由子。

右奥にある4つ程並ぶ体育教官室備え付けの「CHANGING ROOM」の札の掛るスチールドアのひとつを開き、室内に入る真由子。ドアの横にある白いSWを入れると天井のライトがすかさずぱつと点灯する。

「さすが歴史ある聖光女子ね 教官毎に更衣室があるとはねえしかも完全防音じゃないの すごいわね」

4畳半くらいの大きさのある個室、壁には大きな姿見が備え付けられ、その脇にハンガーラック、部屋の中央には長さ2メートル程のちょっと幅広の木製ベンチ。そして逆の壁にはグレーのスチールロッカーが立っていた。覗き防止のためか窓は一切ないがライトのSWと連動しているのか大きな換気扇がぶんぶんと唸りを上げ始めた。

女性らしく何げにくんくんと匂う真由子。【ん 換気扇が強力なのかな 合格ね】

ロッカーを開けると、前任者のものだろうか、ダンベルやらハンドグリップやらジャンプロープ（とび縄）やらゴムバンド（たぶんベンチで腹筋運動を行う時の脚の固定用だろ）等の雑多なものが入っていた。どうやらこの部屋は、更衣室兼トレーニングルームのようだ。【この中は ちょっと匂うわね】少し眉を顰める真由子。

ざっと部屋を見回すと、次にスチールドアのノブを握って押したり引いたりして鍵の丈夫さを確認し、部屋中の壁を叩いたりロッカー内を物色したり、室内をくまなく調べ盗聴器の類が、存在しないことを確認する。意外な慎重さを垣間みせる真由子。

「ふうん 鍵さえ交換すれば 充分に安心して使えそうね これは
ありがたいわ」ニヤリと笑みを浮かべながら一人呟く真由子。

部屋の安全確認を終えると姿見の前で腰に手を当てて仁王立ちする、一瞬自分の全身を確認すると、さつと無造作に白いブラウスを頭から抜き黒のタイトスカートのホックをはずすとぱつと脚をスカートから抜き去る、更に素早く脚を振つてポーンとパンプスを脱ぎ棄てる。「ロロロロと転がるパンプスには気も止めない様子。

あとに残るのは真っ赤の上下お揃いのブラとショーツ。色は赤と派手目だが、デザインはフリルもなくいたってシンプルな感じだ。真由子は、ブラとショーツ以外の下着を一切着けない主義。30歳を超える女性としては珍しい生足派だ。

なんの躊躇もなく手早くその真っ赤なブラとショーツも脱ぎ去る。完全な裸体。その整った肢体を鏡に映す真由子。

ほんのりと焼けた染みひとつない、なめし革のようすべすべした肌。

バランスの取れたすらつとした四肢。長年に渡り鍛え上げられた身体、贅肉の類は一切見受けられないが、表面的にはそんなに筋肉質には見えない。真由子の肉体は、機械的な器具による訓練ではなく、組手や水泳、崖登りなど人や自然等を相手に鍛えている。そのため筋肉の量はそれほど多くはないが、筋肉の質の次元が常人とは全く異なっている。

体格的に目立つところと言えば、広い肩幅と割れた腹筋と常人よりはるかに太い太腿くらい。

そして最大のチャームポイントは、誇らしげに盛り上がる美しいバストだ。その豊かなバストは他の部分に比べ日焼けしていないのでその白さが一層際立つている。その白くて豊かなバストの頂点でつんと上を向くピンクの乳首がとても可愛らしい。バストの下に連な

る引き締まつたお腹とウエスト、縦長の綺麗な臍の下に生える股間の恥毛は非常に薄い。陰部は下付きなのだろう、正面からではその細部を伺うことはできない。

ちょっと腰を捻るとふくよかで大きな白い尻が鏡に映り込む。一見柔らかそつで女性的な尻だが、ぐつと力を入れると太い筋肉の筋が浮き出す。【少し胸が大き過ぎよね。ちょい動きが鈍るのよね】

自分の身体を一瞬で確認すると手元の大きなスポーツバッグから、薄いグレーのスポーツブラ（前面は鳩尾の辺りまでを覆い、背中は肩ひもがクロス（×）し背中がほとんど露出している）を頭から被つて身につける。次にブラとお揃いのハイレグでTバックのグレーのショーツを取り出し脚を差すとわざと履きあげる。
その上にアディダスの青のTシャツと、これも青の膝丈のレギンスを身に着ける。

上下の衣服を身につけた時点で一度全身を鏡に映す。Tシャツはかなり小さめで、ピタッと肌に張り付いている。だが胸の盛り上がりはスポーツブラで締められて、あまり目立たない。青のTシャツはかなり丈が短いのでレギンスの上、15センチくらいが露出し逞しい腹筋と可愛い臍が覗く。レギンスもちょっと小さめなのでぴったりと肌に張り付く。レギンスの下に穿いたTバックのショーツも手伝いヒップのラインが綺麗にでている。ただし下腹部にはくつきりとハイレグのVラインが浮かび出る。

【うん やっぱりこの締め付け感がいいわねえ 本当はブルマを履きたいんけど、それはさすがにちょっとね】変な感想を思い浮かべる真由子。

最後にアディダスの白のスポーツショーツを履くと靴紐をぎゅーっと締め上げる。たんたんと靴先を床に当てる履き具合を確かめる。

【よしつ いい感じね】鏡の前でくいつと顎を上げて全身を確認するど、ばんつと勢いよくドアを開け放ち更衣室を勢い良く飛び出す

真由子。さあいよいよ戦闘開始だ。

第2話 赴任（後書き）

これで準備完了 次回はいよいよ真由子の実戦がはじまります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5197z/>

氷室 真由子の悲劇 改

2011年12月17日18時53分発行